

コミュニケーションに課題を持つ看護学生のセルフ・マネージメントへの援助
臨地実習前後のセルフ・モニタリングへの介入（面接）による
自己効力感の変化を通して

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター

看護は、クライアントとの間の人間関係を基盤としているので、人間関係を学び、実際に援助的関係をつくる能力を育てることは看護の基礎教育における大きな課題の1つであるが、現代の看護学生は、他者と円滑な関係を築くための能力を養う機会が縮小した環境で育ってきている者が多く、人間関係の形成や継続に困難をきたすことが少なくない。更に、臨地実習では、対人援助困難となり結果として満足のいく十分な成果が得られない看護学生が最近増えてきていると感じている教員は少なくない。その上、基礎看護教育において人間関係・コミュニケーション教育内容や方法論が確立されておらず、大半の看護教員が満足していないのが現状である。

本研究はセルフ・モニタリングにより、対人関係における自己の課題に学生自身が気づき、一人ひとりの学生の自己効力感(self-efficacy;以下SEとする)・学習意欲を高める事が、自ら問題解決する能力(セルフ・マネージメント)を育てることにつながり、更には、看護教育の課題である学生の主体性を育てることを目標とした教育方法開発に役立てることを意図している。

コミュニケーションに課題を持つ自己効力感の低い対象の看護学生3名が、臨地実習前後の約1年間にわたってセルフ・モニタリングしながら対人関係における標的行動を設定し、セルフ・マネージメントすることへの介入する効果を、学生の自己行動記録と自己評価記録、ならびに学生との面接記録、一般的(特性的)自己効力感(generalized self efficacy)や学生の課題行動レベルとその難易度の変化を中心に分析した。

その結果、前期臨地実習開始前の実質1ヵ月半の間において、すべての対象学生が、筆者の介入によって自分のコミュニケーションの課題行動が半分ぐらい(41% - 60%)解決(変化)したと自己評価していた。その要因(独立変数)として、エピソード記録を書いてもらい、面接時に学生が問題と考えている行動を、応用行動分析の行動随伴性について説明をしながら明確にしていたこと、行動目標を設定し学生自らが行動チェックしていたこと、セルフ・モニタリング結果(変化)を振り返りながら、学生の努力に対する正確な判断が出来るように介入(面接による賞賛・激励)したことがある。いずれも対象学生も については80%以上効果があったと評価した。

前期臨地実習期間中(継続的な介入期間中)、対象学生が設定したその学生個人が困難であると考えたコミュニケーション・対人関係の特定課題は、実習病棟が変わる度にその内容は具体的になり、そのレベル・難易度ともに低下するとともに行動が改善されていた。さらに、極めて低かった一般的自己効力感がすべての対象学生において高まっていた。その要因(独立変数)として、自分の特定課題を設定し、それを意識した行動をしてもらったこと、実習中に学生自身が自己の認知を振り返るための記録用紙は使用する。また、実習中の困難な場面を思い出しながら自己の認知を振り返るために記録用紙を使い、筆者とともに体験を振り返って認知の再体制化を進めていったこと、前回の面接で設定した具体的な特定課題のレベルおよび難易度の変化を振り返りながら、学生の努力に対する正確な評価が出来るよう面接時に賞賛・激励し、成功体験を蓄積できるようにしたこと、さらに実習において学生自身が、Banduraが提唱している自己効力感を得られる経験(実習)したことが考えられた。

後期臨地実習期間中（未介入期間中）に対象学生のうち1名は一般的自己効力感がすぐに低下したが、再度前期実習期間中の介入を行うことで一般的自己効力感が再度上昇した。また一般的自己効力感がすぐに低下しなかった対象学生1名においては、実習態度・行動面において教員からの評価は極めて悪くなっていた。今回のような極めて一般的自己効力感の低い学生には、自分の課題達成を実感させ自分を肯定し自分に自信を持てるような実習期間中にわたる継続的なセルフ・マネジメントへの介入の必要性が明確になった。

また、約1年に及ぶ対象学生との面接内容から、看護学生が置かれている実習環境・学習集団への改善の必要性が示唆された。